早稲田大学図書

大槻玄澤の「西客對話」

山岸光宣

和蘭商館の甲比丹が江戸參府に當つて帶同した醫員が日本醫學の發達進歩を促したことは、今更いふまでもない。斯くの如き醫員の參加は、慶安二年（一六四九）を以て最初としたが、その醫員はカスパル・シャンベルゲン（Caspar Schamberger）といふ獨逸人であつた。これは和蘭商館が醫員の使命の重要性を意識して、これが選擇に細心の注意を拂つて、廣く人材を西歐諸國に求めたからである。斯くの如き事情の下に來朝した獨逸出身の醫員中には、上記のシャンベルゲンの如き所謂カスパル流の蘭方外科醫術を創始した人もある。またケンプェルやシーボルトの如き獨逸醫員の效績は、餘りにも重大である。その外にもなほ獨逸醫員が渡來して我が國醫術に多大の貢獻をなしたことは、次第に明かになつて來た。その一人として寛政六年（一七九四）甲比丹ゲイスベルト・ヘンミーの江戸參府に隨行した獨逸出身の醫員ベルンハルト・ケルレルのことは、大槻如電翁の新撰洋學年表にも外科醫ハルトケルレル（三二）として記載されてゐる。同書にはまた同年より二十一年間甲比丹江戸參府六回毎次の和蘭人との對話を記錄した西賓對語といふ同家所藏の冊子に從つて、當時の醫官とケルレルとの對話の有樣の記述が抄錄されてある。大槻家所藏の冊子には未だ接するの機會を得ないが、岡村千曳氏所藏の甲寅來賓西客對話なるものゝ借覽を許されたので、この紙上に於てこれを紹介して見ようと思ふ。岡村氏所藏の寫本は、大槻玄澤の記述を宇田川槐園（玄隨）が謄寫したもので、本文半紙二十枚、

洋学文庫
文庫8
E 38
2

なほ卷末に馴鹿に關する桂川甫周の漢文の解說一枚を添へてゐる。大槻家の冊子は寛政六年對話だけでなく、それより六回の分をも含んでゐるのであるが、岡村氏所藏の寫本は寛政六年のケルレルとの對話のみを記したものである。併し洋學年表の抄錄に從へば、ケルレルとの對話の記述は、兩者全く同一である。

大槻玄澤は卷頭に次の如く記して、桂川甫周の一方ならざる盡力により、陪臣の自分等にまで蘭人との對話を許された感激の情を披瀝してゐる。

此一擧余等年來此道に篤きの餘り桂公（桂川甫周）の深志に出ると雖も陪臣の身として恭しく嚴命を奉じ殊方の略客に應接を許され素志の疑問に及びしこと其益不益は姑く論ぜず我道の面目にして本懷の至り感歎するに勝へざることなり因て其顚末を記して後昆に傳ふ。

大槻玄澤は先づ蘭人江戸參府の由來を說いて、甲比丹に醫員の隨行するは、幕府の典醫等が疾病の治療等についての質問に應答せんがためであることを述べてゐる。從來典醫のみは蘭人との質疑應答を許されて陪臣には全く禁止されてゐたのを、寛政六年典醫桂川甫周は蘭人と對談するに當り、同學の故を以て大槻玄澤、森島甫齋、宇田川玄隨、杉田玄白、前野良澤にも、その席に列することを許されんことを幕府に願ひ出た。勿論當時のことであるから、種々の面倒な手續を經て後、始めて許可が下つた。

蘭人の對談は五月四日、五日の兩日に亙つて行はれた。四日には正午頃桂川甫周がその息甫讓、大槻玄澤、森島甫齋、宇田川玄隨を伴つて蘭人の旅館なる日本橋本石町三丁目の長崎屋源右衛門方に赴き、大通詞加福安治郎に面會して種々打合を了して待つ程に、典醫の栗本瑞見、澁江長伯もこれに加つて、午後四時過から小通詞今村金兵衛の通辯によつて、對談が始められた。翌五日には午前十一時再び同じ旅館に至つたが、この日の列席者は、栗本瑞見、佐藤有仙、桂川甫周の外に、一橋家の典醫石川玄常の息玄德と、大槻、森島、宇田川玄隨であつた。この日も午前中は天文方の對談があつたので、醫師の對談は、やうやく午後四時過に至つて、大通詞加福安治郎の通辯で始められた。特別の取扱によつて列席を許されたにも係はらず杉田玄白と前野良澤の二人は、遂に事故のため參列しなかつた。

大槻玄澤は更に兩日に亙る對談の有樣を細敍してゐる。一行が長崎屋の毛氈を敷いた二階に通され、長崎奉行の檢使、下檢使の兩人立合ひの上順次着席すると、甲比丹が歡迎の辭

を述べ、通詞今村金兵衛がこれを通辯した。甲比丹の（ヘンリー・ヘンミー）（歐字と振假名は原文に據る。以下同じ）や書記生の（レオポルド・ウイレム・ラス）の素性や年齢などが書いてあるが、これは省略して、ケルレルに關する記述に移る。

醫生の名を（アムブロシウス・ロデウイク・ベルナルド・ケルレル）といふ。（ホーゴドイツ（國の名なり、郷里をイブリュッケ）といふ）の產にて齡三十二其學才の短長を審にせずといへども、稍志ある人と見ゆ。殊に物產を好むよし。

これによつて彼は獨逸のツワイブリュッケン（Zweibrücken）の生れであること、また年齡や、教養のほども大凡わかるのである。いよ〳〵典醫等との應答が開始されたが、質問が百出、それに通詞の不完全なために意志の疏通を缺き、席末に列した大槻玄澤等の陪臣輩は、對話することを得ずして、頗るこれを遺憾とした。それにも係らず、當時有名なローレンツ・ハイステルの外科書の蘭譯本の飜譯（瘍科新書といふ）を試みてゐた大槻玄澤は、その中に骨節を破損せしめる器械を列擧した中にあつた風車の製を理解することが出來なかつたので、これに關して質問を試みた。甲比丹は圖を畫いて說明して呉れたので、これが登玉函（テレンス）の奇器圖說中に風扇と記されたものと同一物であることを知つて、こゝに始めて年來の疑問が氷解して、

これに由つて一篇瞭然たり。愉快に堪へずと謂ふべし。

と歡喜してゐる。大槻玄澤はなほケルレルに向つて、ハイステルの外科書に匹適するやうな內科學の良書をたづねたが、通辯の不完全なために、遂に要領を得なかつた。ケルレルはこの時携帶した二三冊の醫書を示したが、それは皆簡單な外科書であつたので、大槻玄澤は毫も啓發されるところがなかつたと氣焰をあげてゐる。併し彼はその中の多くが獨逸語で書いてあるので、獨逸語は和蘭語と異つてゐるために、一句をも理解されないことを遺憾とした。特に彼はその中に「パッスといふ人の繃帶の術を記したる書」があつたが、これは自分達が久しく渴望してゐたものであるのに、讀むことの出來ないのは頗る遺憾であるといつてゐる。なほこの時（ヨセフ・ヤコブ・プレンク）の眼科學の蘭譯もあつたが、惜むらくは匆々の際委しく見ることを得なかつたと書いてゐる。

また今日から考へると頗る滑稽に思はれるが、最上德內が曾て蝦夷地から持ち歸つた馴鹿の毛皮を持出して質問を試みてゐる。なほ大槻玄澤をして驚嘆措く能はざらしめたものは、佛蘭西の巴里で婦人の手によつて造られた蠟製の人間の首の模型である。その側面が切解されてゐて、筋肉から大小

の血管に至るまで、形狀といひ、色彩といひ、實に眞に迫り、特に彼等の如く既に囚人の腑割けを目視した者にとつては、宛然實物を見るの感があらしめた。斯くの如き參考品の如何に醫術の研究を裨益するところの大なるかを思へば、彼は實に羨望に堪へなかつたものゝやうである。なほこの日の應答が終つてから、蘭人は彼等に二種の葡萄酒をすゝめ、また砂糖煮の果實を饗應したことが記されてゐる。

翌五日は午前中天文方の質問があつたので、栗本瑞見、佐藤有仙、桂川甫周の外に、石川玄德と、大槻、森島、宇田川等の醫家七人との對談が大通詞加福安治郎の通辯によつて始まつた時は、既に午後四時を過ぎてゐた。この日大槻玄澤は先づ當時西歐に於て流行の瀉血法は如何なる人に施して效果があるかを問ふたが、意通せずして要領を得なかつた、彼はまた初生兒の臍帶の脫落した痕跡が化膿して癒えざるものゝ處置を訊ねたが、「チンキチュールメラ」といふものを綿三枚重ねたものに浸ませて、これを患部にあて、更にその上を綿布を以て被ひ、繃帶を三四遍卷いておけば間もなく全治すると答へ、「チンキチュールメラ」の製法を次の如く傳授したと書いてゐる。

〔チンキチュールメラ〕方

浸藥八錢右末として燒酎九十六分の中へ浸し硝子壺に入れ固封し天日に晒すこと數日時々振まはして混和せしめて以て用に充つべし。

これは多分ヨチームチンキのことであらうと思ふ、また西歐流の脉の診法をも敎へられて、よく血液の自然の循環を知るに適することに敬服した。ケルレルはまた日本に種痘法があるかと問ふたので、大槻玄澤は我が國に未だこれなしと答へることを恥辱としたのであらうと思ふが、支那の醫宗金鑑に記載せられた方法を答へた。これを聞いたケルレルは、それは支那に行はれる方法であつて、その效果なきを指摘して、當時西歐に行はれる種痘法を敎へ、また桂川甫周に天然痘治療書一冊を贈つた。

彼等はまたケルレルの藥籠を見せてもらつて、その完備したのに驚嘆したが、その中に「キナキナ」といふ解熱の散藥がフラスコの中に入つたものがあつた。ケルレルは、これは和蘭ではコールツバスト（Koorts-bust）、即ち熱病に特效ある樹皮といふ義だと說明して頗る高價なので和蘭でも貧民の間ではこれを用ひないで、エーケボーム即ち柏の樹皮を代用するといつてゐる。大槻玄澤はまた脫腸帶と思はれるものを示されたので、圖を挿入してこれを說明して、その製作の巧

妙なるに驚嘆してゐる。大槻玄澤の手記は頗る簡單なものではあるが、當時西歐醫學の研究者にとつては、蘭館醫員との對談が如何に裨益するところの大なるものがあつたかを物語るものとして、また當時既に蘭書に滿足せずして更に進んで獨逸醫書にまで注意を拂はんとしたかを窺ふ點に於て、興味のあるものといふべきである。

（圖書館歷訪、七〇頁よりつゞく）

るが、兎も角も全て二十二年間の克明な日記が物されてゐた事だけは事實だつた。しかし、前表によつても明かな如く、最も有力な帝大所藏十三冊は過ぐる大震災にあたら燒亡し、僅かに天保五年甲午日記と、和田曼翁が偶然謄寫した天保二年辛卯日記が「馬琴日記」として危く同記の面影をとゞめるに過ぎなかつたといふ憂目に遭遇した今日、本館三記は愈々監護を要することゝなつた。

これらを含めた曲亭叢書が本館に入手するに至る經緯についても祕められた一場の苦心談があるのであるが、遺憾ながら割愛する。

（馬琴の遺墨（早稲田文學第二二號）。春城・隨筆早稲田。和田・早稲田大學圖書館の曲亭手澤本（書物の趣味・第五册）

圖書ではないが、大ホール正面に直徑二間半の圓窓に「明暗」と題する大壁畫がある。これは昭和三年五月、觀山、大觀の合作に成り、構圖は蒼々たる曉雲を破つて燦たる日輪の立昇る圖で大殿堂のホールの構造とよく調和を保ち、我圖書館の一大景觀を添えてゐる。

洋圖書に就いても當然何等か言及しなくてはならないことであつた。本館總藏書數五十萬に垂んとする中、洋書も二十萬の多きを數ふるに至つてゐるほどであり、殊にこゝ數年來は寧ろ洋圖書の充實に力點が置かれてゐる現在であつて、今代早稲田大學圖書館の面目を語るとすれば洋圖書を以て代表せしむべきが至當といつていゝ。しかし今回は本館前史を話すに停めて、すべて他日の機會に讓りたいと思ふ。

（早稲田鶴太郎）

寄贈書紹介

○詩集　固次準立方體詩派宣言

無邊廣に大膽に、詩想の動きのまゝに詠つた詩集である。その裝幀も用紙も荒つ削りの感のあるタクまざる大型判で、軌を逸してゐるかの感があるところに特色がある。（限定三圓、奈良縣吉野郡下市口、豚詩社）　澁江周重樂

續銀魚部隊（二）

齋藤昌三

三度回覽雜誌のこと

又々文壇人の回覽誌時代の文獻を一つ御披露することにした。

前の谷崎氏や志賀氏について紹介した回覽誌は、いづれも本人が十三四歳の鼻つたれ時代の邪氣のないものであつたが、爰に拾つた「稻光」は、恐らく同人の大學在學中であらうが、發表年代が全く判らない。

この「稻光」は早大の學生楠山正雄、片山天絃、會津矢一、野尻抱影、生方敏郎、袖岡喜三、篠原惟運、田村江東、延川直臣、中井新三郎、青賢治、高日義海、相馬御風の十三同人に依つて創められたもので、早稻田に因んで「稻光」と命名したものと思ふ。いづれも文字から文才から見て二十歳を越して居るらしく、約半數は文壇に知られてゐる者で、明治も四十年頃の回覽と想像する。

僕の手にしてゐるのは第二號のみで、これは天絃の編輯であるが、第一號は袖岡の編輯であつたことが二號の後記で推察出來た。然し第三號以下が出たものかどうか。

この第二號で最も長文は楠山の「眞夏の夜の夢」で、無論沙翁ものゝ譯である。次は四行詩五首で流泉としてあるのは片上伸である。第三次の「和良居亭」といふ小說は、樂鄕坊としてある許りで誰の變名か判らぬが、脚本「賴豪阿闍梨」は野尻正英と署名してある。春二題とした詩は梧窓庵主人としてあり、小說「鶴卷町」の作者は、なにがし、通信文式な